

ナミビアの ドイツ系白人と「国民意識」

ドイツ人学校を訪ねて

柴田 暖子

はじめに

ナミビアは1990年3月に南アフリカ共和国から独立した。第二次世界大戦後に誕生した他の新興国家と同様に、ナミビアにとって早急な、また最大の課題は「国民」の創設である。

「国民的和解」というナミビア政府の国造りにおける理念を鑑みれば、ナミビアの住民に国民意識が芽生えるには、100年以上にわたる植民地支配によって築かれた「白人」とアフリカ人（本稿ではこの言葉を「白人」に對置するものとして、ナミビアに居住する黒人とカラードの総称として使用する）の間にある物心両面における隔たりが解消され、旧体制を維持してきた植民地的な価値観から解放されなければならない。その第一歩として、南アフリカ共和国が用いてきた西洋中心史観を改め、アフリカ人が自らナミビアの歴史をとらえ直す必要がある。すでに独立運動中に、「南西アフリカ人民機構」(SWAPO) がナミビアの独立を支援するグループならびに国連の協力を得てそれを試みていた。この時作成された歴史の教科書は、現在ナミビアの公立校で使用されている教科書のもとになっており、また日本語訳も出版された（ヘニング・

メルバー編 ナミビア独立支援キャンペーン・京都訳『わたしたちのナミビア——ナミビア・プロジェクトによる社会科テキスト』現代企画室 1990年）。

この教科書は、植民地支配に対する批判とナミビアも含めたアフリカ諸国の独立に対する肯定的な評価に特徴づけられている。このような新しい歴史のとらえ方は「白人」にどう受容されているのだろうか。それを探ることで、ナミビアに居住する「白人」が「ナミビア国民」として自らを意識しているか否かを明らかにする手がかりが得られよう。

ところで、「白人」について看過されてはならないことがある。それは、「白人」がアパルトヘイト体制の中で認識されたカテゴリーにすぎず、実際には「白人」と称される人々が、みな一様に自らを「白人」と認識しているわけではなかったということである。ナミビアの「白人」には人口が多い順に、アフリカーナー（ボーア人）、ドイツ系、そしてイギリス系がいる。ナミビアを最初に植民地として領有したのはドイツ帝国であった。第一次世界大戦でドイツ帝国が敗戦すると、この地域は隣国の南アフリカ連邦に支配された。この時ナミビアに居住していたドイツ系白人は国外追放を免れたとはいえ、南アフリカ連邦政府が推進するアフリカーナーの強力な入植政策にあい、戦前に

おける支配者としての地位を喪失してしまった。こうした背景はドイツ系白人に「二級市民」扱いをされているという感情を抱かせ、「白人」として自己を認識していくよりも、むしろ「ドイツ人」たることを重んじる傾向を生んだ。第一次世界大戦後、ドイツ系白人は領内でのドイツ語の使用やドイツ文化の保持を保障するよう南アフリカ連邦ならびに南アフリカ共和国政府に要求している。その結果、それはドイツ人学校の存続という形でのみ保障された。ドイツ人学校は、南アフリカ連邦ならびに南アフリカ共和国の支配に対する抵抗の場となり、「ドイツ人」になるための教育を施す機関という性質をますます強めていった。こうしたドイツ人学校には、今日もなお、1万8000人ほど居住すると言われるナミビアのドイツ系白人の子どもが多数通っている。

このように、これまで「白人」ではなく「ドイツ人」として自己を認識し続けてきたナミビアのドイツ系白人の中には、独立後「ナミビア国民」としての意識が形成される可能性はあるのだろうか。筆者は1996年3月から4月のはじめまでの滞在期間中にナミビアの首都ウィンドフークにある公立ドイツ人学校の初等科と中高等科、ならびに小中高一貫の私立ドイツ人学校の合計3校を訪問して調査を行った。この調査をもとに、ナミビアのドイツ系白人における国民意識を検討する。

1 公立ドイツ人学校（初等科）

公立のドイツ人学校では、他のナミビアの公立校と同様に教育省の提示する教育カリキュラムにしたがって教育を行わなければならない。初等科においては歴史が独立の科目として教えられていないので、筆者はどのような歴史がそこで教えられているのかを知ることはできなかった。そこ

で初等科については言語教育の面から考察する。

ナミビアでは英語が公用語とされているため、公立校はすべて英語で授業を行なうことが原則となっている。しかし教育的見地から、初等教育開始から3年間は子どもの母語で授業を受ける権利が保障されている。これにより公立のドイツ人学校の初等科においては、入学時から3年間はドイツ語で授業を行なうことができるのである。この学校に通学している子どもは「白人」でドイツ語を母語としている者がほぼ全てであった。アフリカ人の生徒にも出会ったが、彼らはいわゆる「DDRキンダー」と呼ばれる子どもたちである。「DDRキンダー」は、独立運動中に難民として旧東ドイツで生活していたため、ドイツ語が堪能である。いずれにせよこの学校には、ドイツ語を母語と同じレベルで使用することができる者が通っているわけである。

ドイツ語での授業が固定化されている点で、この学校に通学することのできる者はドイツ語を母語なみに使用できる者に限られることになり、ある意味で公立校に期待される「ナミビア国民」を育成するための学校として、機能していないことがわかる。なぜなら、それだけドイツ語やドイツ文化に固執するようになり、「開かれた学校」としての性質が育たないからである。筆者が訪れることのできた学校の中で、この学校の校長が最もドイツ語教育に固執していた。それはおそらく、公立校の初等科がドイツ語を授業で使用する唯一の機関であるからと考えられる。インタビューの中で、校長はドイツ語教育の衰退を憂慮していることを繰り返し発言しており、現在この学校で教えている教員が全員ナミビアのドイツ系白人であることをあげて、最良の状況だと位置づけていた。これは、独立後の新しい教育プログラムに不満なことを表している。つまり、「ナミビア国民」とな

るための教育を受け入れようとしない姿勢を表しているのである。

しかし、この校長のような姿勢は過渡的なものにすぎないと思われる。なぜなら、教員の補填は教育省が管轄しているため、将来アフリカ人のドイツ語教師が派遣される可能性があり、ナミビアのドイツ系白人のみで教員が構成されることはなくなると考えられるからである。生徒だけでなく教員に非ドイツ系白人が派遣されれば、「ドイツ人」教育に主眼を置いた教育プログラムは崩壊するはずである。かわって従来のドイツ系白人コミュニティの閉鎖性が弱められ、非ドイツ系白人との共生の意志が生まれることが期待できる。そうすることによって、ドイツ人学校初等科においても「ナミビア国民」としての意識が芽生えてくるのではないだろうか。

2 公立ドイツ人学校（中高等科）

合計6年の初等科を卒業すると、ドイツ系白人の多くは中高等科に進学する。アフリカ人の多くが初等教育を終えることすらできないことと比べると対照的である。概して、ドイツ系白人の間では高等教育への信望が厚い。独立後失業率が上昇していることが、彼らが高等教育に強い関心を抱く最大の原因だと考えられるが、植民地時代の価値観の影響で、「教育程度の低いアフリカ人」との差別化をはかるために、高等教育を受けさせようとする傾向があるとも言われている。中高等科では、ドイツ語は授業において全く用いられない。この学校がドイツ語教育についてあまり多くを語らないということは、学校内で用いられる言語が公用語の英語であるという点が大きく関わっているように思われる。ドイツ語への固執があまり見受けられない点は、「ナミビア国民」としての意識

を育てる上で重要な背景だと言えよう。

公立校では教育省の認定する複数の教科書から学校が自ら選択し、それを授業で用いることになっている。この学校では興味深いことに、SWAPOが独立運動中に自主教育のために編纂した歴史の教科書を踏襲した内容を持つものを、歴史の授業で用いていた。独立前のドイツ人学校では、植民地支配を批判的に記しているこのような教科書を使用することなど考えられなかった。公立校で使用するこのできる歴史の教科書には、西洋中心史観を表した、つまり従来のドイツ系白人の歴史観に近い教科書があるにもかかわらず、それとは全く異なるSWAPOが編纂したものを用いていることから、この学校が独立以来かつてのドイツ人学校に期待されていた役割、つまり「ドイツ人」としての教育を施す場という性質を変化させていると考えられる。歴史教科担当教師のインタビューでは、現在この学校で使用している教科書よりも西洋中心史観が著された教科書の方が優れているとの意見が出たが、最終的に学校に選択権があることを考慮すれば、この学校は「ナミビア国民」育成のための学校として、望ましい状況にあるのではないだろうか。

授業内容にもその傾向は現れている。筆者が見学できたのは9年生の授業で、ちょうどドイツ植民地時代を学んでいるところだった。内容はアフリカ人による反植民地運動を取り上げており、重要人物としてドイツ人の名前はあまり挙がらなかった。ドイツ植民地時代の賛美に終わらない新しい歴史教育は、「ナミビア国民」形成にとって重要な背景となるであろう。

3 私立ドイツ人学校（小中高一貫）

筆者が訪れた「ウィンドフーク私立ドイツ人学

校」はドイツ人学校の中でも特異な位置を占めている。その理由は第1に、12年の課程を修了して大学入学資格を得た後、さらに1年間延長してドイツの大学入学資格を取得することができるという点である。ドイツの大学に進学する機会が与えられるので、ドイツ系白人の間ではエリート校に位置づけられている。第2に、ドイツ語は9年生まで授業で使用され、10年生から2年間は大学入学資格取得の関係上、英語での授業が導入される点である。第3に、ドイツ語での授業がこの学校での生活の多くを占めているので、教科書もドイツ語で書かれた独自の教科書を用いている点である。歴史の教科書はドイツの学校で用いられているものであり、10年生から2年間使用される英語の歴史教科書もSWAPOが編纂したものではなかった。第4に、教員の3分の1がドイツから派遣された者だという点である。

これまでの研究では、この学校に見受けられるこれら4点の特徴が「ドイツ人教育」に主眼を置いたものであるとして、ナミビアのドイツ系白人コミュニティの閉鎖性を再生産するものとみなされてきた。しかし、1978年にすでにドイツ語を母語としない者のための特別コースを設けていることを考慮すれば、この学校が他のナミビアの住民に対して必ずしも閉鎖的であるとは言えない。当時、アフリカ人の子どもを受け入れることに対してドイツ系白人両親側の反発は大きかったが、校長はこの学校を「出会いの場」として提供する姿勢を崩さなかった。この方針は現在でも貫かれている。この点について、なぜ非ドイツ系白人を受け入れたのかを現校長に尋ねてみたところ、「彼らもナミビアの国民だから」という答えだった。これまでドイツ系白人がナミビアという国名を認めず、ドイツ植民地時代の「南西アフリカ」という呼称を用いていたことを考慮すれば、「ナミビア

の国民」という言葉がドイツ系白人から聞かれたことは驚きに値する。現在のドイツ系白人がアフリカ人政権下でのナミビアの独立を受け入れ、自ら「ナミビア国民」として意識しようとする姿勢を有していると言えよう。

ただし看過されてはならないのは、やはり歴史の授業にドイツで使用されている教科書を用いている点である。この教科書の中には、ナミビアの歴史を学ぶ項目は全くない。また、英語の歴史教科書もナミビアの教育省が認定している教科書ではなく、従来の歴史観を表したものをを用いている点も問題視する必要があるだろう。

おわりに

ナミビアのドイツ系白人はこれまでの研究によると、ドイツ植民地時代の価値観に基づいた「支配者」としてのアイデンティティーを有しており、それゆえにアフリカ人政権下で独立したナミビアにおいて、「ナミビア人」としての国民意識を持つことは困難であると考えられてきた。しかし独立から7年がたった今、ドイツ系白人の中にも「ナミビア国民」を志向する意識は現れているように思われる。国民意識の形成には、ナミビアに居住するあらゆる住民の間に共通な歴史認識が必要とされるが、公立ドイツ人学校の中高等科における歴史の授業は、「ナミビア国民」を創る上で望ましい状況であると言えよう。現在ではまだ、ドイツ系白人がみなアフリカ人による独立を受け入れ、自ら「ナミビア国民」と意識するには至っていないが、学校をはじめ小さな変化がドイツ人コミュニティの中で現れているということは、ドイツ人が「ナミビア国民」と自ら位置づけるようになるための第一歩と言えるのではないだろうか。

(しばた・あつこ／一橋大学大学院社会学研究科)